また問題が含まれている Bewick's　Yankowski's を区別する定義がないことである。前記の「The swans」の中では Bewicki's で全編を通じているが、同氏の Bird of Britain and Eupop の中では Bewick's と Yankowski's を明確に図示し、区別されている。

IWRBの調査表のうち分布図には Bewick's swans　C. c. bewicki's とあるも Jankowski's は載っていない。一体 Jakowski's swan とは何だろうと不審感が深くなる。

以上、偶感的なことを拉例したが、要約すると

1. コハクチョウを英語で書くとき Whistling swan とするとアメリカコハクチョウと紛らわしい状態になる。学名を付記しなくともよい名がありませんか？
2. Bewicki と Yakowski の特徴とみわけかたについて、何か文献、資料はありませんか。或いは同一亜種の異語か？　明確にすることができませんか？

中海干拓の進行と白鳥の行方

岩　田　正　俊

中海干拓も進行し、揖屋工区と島田工区とは、すでに昨51年において切られ、海水表面積は順次減少して僅かに水溝を残すのみとなった。

中海の白鳥は、特に意東白鳥海岸に集ってくるのは年々その数を増加し、51～52年季には、その数500羽を越す日が多くなった。この現象は種々の原因もあるが、石川県の河北潟では干拓の進行と共に、その数を年々減じつつあるのと、何等かの因果関係のあることは否むことはできない。

中海においては、干拓の進行と共に白鳥のねぐらを奪われることを杞憂し、49年島根県においては、時の環境保健部長と、自然保護課長の名コンビにより、「中海地区水鳥保護対策調査専門委員会」を設置して、その対策を数回協議開催したが、この計画は一向に進まず、その上担当の鳥獣保護の責任にある課長、係長は転任し、新任の担当課長は全くこの方面には、関係も、知識もない一行政官吏に過ぎず、在任中先進地視察と称して、某鳥獣保護員を従者として同行し、その結果「将来の学術的研究を待つ」と称して、お茶を濁しているうちに他に栄任して去り、自然保護課も運命を共にして消えた。（後進県を標ぼうしている島根県にはあり得べきことだ。）

一方、「白鳥はもともと宍道湖にいたものだ、中海に住めなくなれば、それを幸に宍道湖にもどってくる。それまで手をこまぬいて待てばよいではないか」との説を称える人もいる。

そもそも中海の白鳥は、宍道湖が不適で中海に移ったと考えている人もいるが、中海の数百羽という大群（52年にはコハクチョウは日本では最多数となった）の白鳥は、決して宍道湖から移ったものでもなく、他から新に飛来したものが大部分である。

昭和51年～52年季の門脇益市さんの、中海の白鳥観察記をよく見ると分るように、意東白鳥海岸の白鳥は、52年1月末から2月初旬にかけて、その飛来数が580余羽となっている。

そして心配された夜のねぐらは、白鳥海岸の波浪のはげしい日には、急ぎ揖屋工区や島田工区の残水

面の溝へ、または海水面のある彦名工区へと避難分散したが、波静かな時には白鳥海岸からさらに崎田鼻沖で泊り、従来余り見られなかった現象が現れた。

中海のように給餌場とねぐらの場所の異った白鳥の生活場所は、他では見られない。他地方では昼間の生活場所とねぐらとは、多少の移動はあっても大体同一場所である。

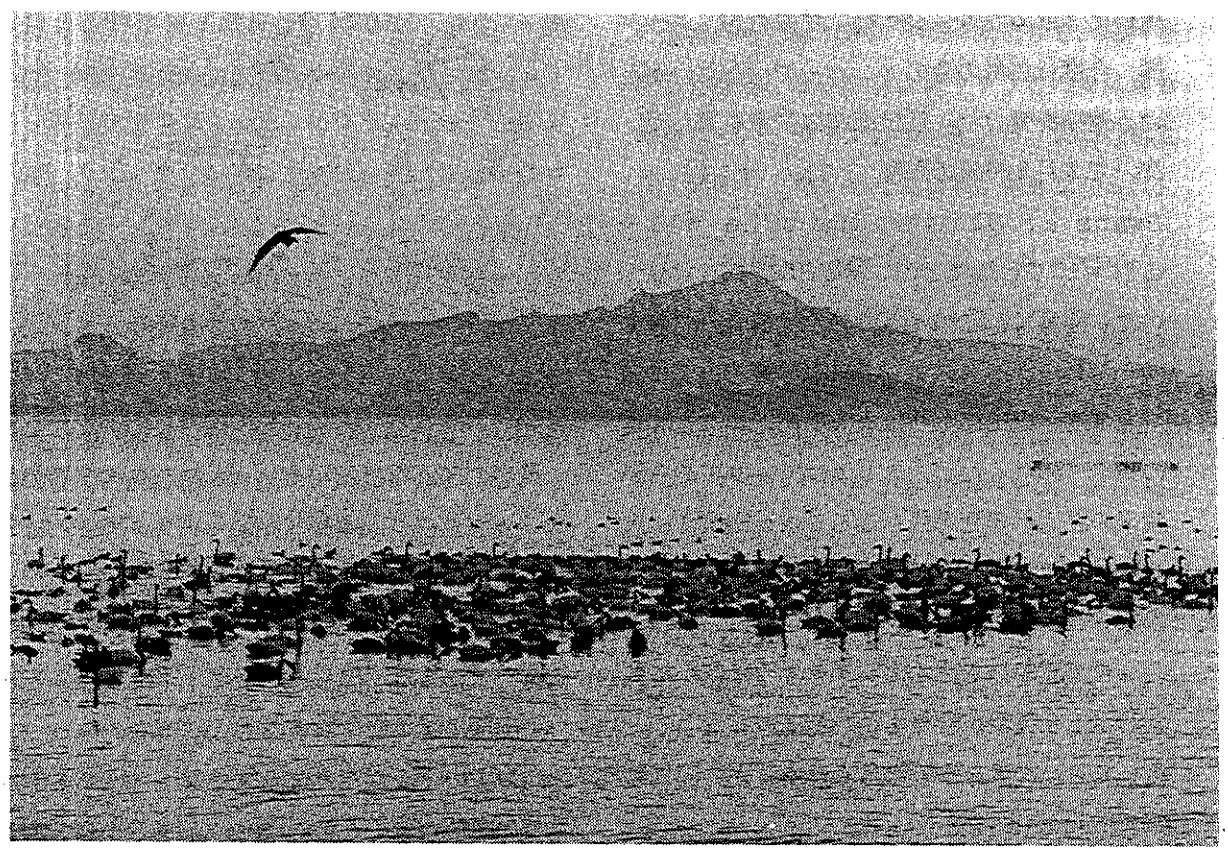
そこで、干拓が進むにつれて中海ではねぐらの場所を何所にすべきかと、誰しも同様に考える問題である。島根県当局者としては、前述の委員会をあらゆる方面から、中海に関係ある役所、大学、民間からの各専門家を委員として選び委嘱しているのである。

中海の白鳥のねぐらとなっている揖屋工区、その他も年々益々生息地とはなり難いことは、誰しも認めるところであり、従って白鳥海岸を何とかして安住のねぐらの場所としてやらねばならない。これが目下の白鳥保護の重要問題である。

このためには本誌の門脇さんの、白鳥海岸における白鳥の生態観察の報告書を、よく検討して見ればその回答は自ら明かである。

即ち、白鳥海岸の白鳥生息地に、波消堤を築いて波浪を消す安住の地を作れば、白鳥達は他の白鳥棲息地と同様に、昼夜そこに生息することができる。

この波消堤を築くことには、恐らく多くの方々は賛成と思うが、要はこの実行にある。県当局者は白鳥保護の責任を感ずるならば、速かにこの保護方法を実行するにあるのみである。



（朝給餌の時間に集まる中海のコハクチョウ　1977. 12. 21　本田）